



日本計量生物学会 ニュースレター

1. 巻頭言 「統計専門家とは？」	- 1	7. EAR-BC (East Asia Regional Biometric Conference) 2013・若手会員発表者への旅費等補助のお知らせ	- 9
2. 理事会報告	- 2	8. 2013 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 9
3. 監事信任投票の結果報告	- 5	9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 10
4. 2013 年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い	- 5	10. 編集後記	- 10
5. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 5		
6. 2013 年度日本計量生物学会年会・学生会員発表者への旅費補助のお知らせ	- 8		

1. 巻頭言「統計専門家とは？」

大橋靖雄（日本計量生物学会会長・東京大学大学院医学系研究科）

このたび日本計量生物学会会長を 2 年間務めることとなりました。前々回のニュースレターにも書かせていただきましたように、この学会はそもそも IBC の 1984 年東京開催のために作られたという経緯があります。昨年 2012 年に前会長・佐藤俊哉先生、前々会長・丹後俊郎先生のリーダーシップにより IBC 神戸開催が成功裡に終わり、一つの段階・区切りを超えたような気持ちです。Biometry とくに医療・健康科学を支える Biostatistics がようやく日本でも「認知された」という区切りです。

2 月 7 日-8 日に雪祭りの札幌で私が代表理事を務める日本臨床試験研究会の第 4 回学術総会が盛大に開催されました。この会は医師研究者・統計家・データマネージャー・リサーチナースと CRC・医療施設の試験事務局担当者・企業の開発および製造販売後研究担当者など、業種を問わず臨床研究・試験を支える専門職の横断的な学会として 2009 年に設立したのですが、435 人の会員のうち約 200 名が医療機関と大学からの参加という、当初の予想を上回るアカデミア主体の学会となりました。国の治験・臨床試験の活性化政策、とくに先端医療をリードする中核病院には統計家とデータマネージャーなど専門家を配置した支援組織を作らねばならないという要件が大きく影響した結果です。私が把握する限りでも、4 月までに新たに 6 大学病院が准教授以上の待遇で統計家・臨床研究専門家を雇用する見込みです。しかし「形」として統計家を雇用しなければならないという状況は必ずしも健全とはいえません。上記の区切りを踏まえ、改めて統計家の役割を考え、訴えるべきと思います。過剰な、あるいは誤った

「期待」に若い優秀な人材がその才能を発揮できなくなる事態を恐れるからです。

統計専門家とは？

「統計専門家として既に 12 年も働いていたにもかかわらずスイスの製薬企業で働きだしたときに、私はいかに多くのことを更に学ばねばならないか知って驚いたものである。それも、医学、薬学、新薬開発といったことではなく、専門の統計学をである。」Senn, S: *Statistical Issues in Drug Development* (Wiley, 1997).

「統計学者とは、自分を一流の統計学者と思っている 2 級の数学者であり、応用統計学者とは、自分を一流の応用統計学者と思っている 2 級の統計学者であり、生物統計学者とは、自分を一流の生物統計学者と思っている 2 級のサイエンティストのことである。」Yuh, Liang (1999).

「研究の墓堀人夫となるな、産婆たれ。」佐久間昭 (1990 ころ)。

「研究者の優秀な執事たれ。」奥野忠一 (1990 ころ)。「よい臨床試験を組むには必須というのは皆知っているが、さてどこにいけばいいのかよく分からず、統計家自身も『よい統計家に相談しなさい』とは言うけど『私がそうではない』と言うのみで、どこで誰に相談しろ、といっってはくれないので殆ど幻ではないかと思われるような存在。」里見清一・吉村健一：誰も教えてくれなかった癌臨床試験の正しい解釈 (中外医学社, 2011)。

Senn の言葉は医療・健康科学分野での統計手法の独自の展開を例示しています。Yuh は「生物統計専門家は科学者たれ」と皮肉たっぷりに表現しています。統計家は (p 値を計算し) 研究に駄目出しするのではなく育てる、と佐久間先生は述べ

ました。奥野先生の言葉はわかりにくいのですが、しばしばパッションで行動する研究者に対し、主体性を失わせることなく、仮説を定量化しそれをデータで証明するための道筋を示せ、と述べられています。先人の言葉を反芻しつつ、若手のため

のよりよい環境を作り、真の生物統計家を「幻」の存在としないことが学会の役目であると考えます。学会員の皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

2. 理事会報告

浜田知久馬、佐藤俊哉（庶務担当理事）

○2012年度第5回対面理事会および2013-2014年度新理事会（新旧合同理事会）議事録

日時：2012年12月1日（土）14:00～16:00
会場：東京理科大学神楽坂校舎3号館7階会議室
出席：和泉、大橋、大森、佐藤、寒水、手良向、服部、浜田、松井、松山、森田
欠席：上坂、巖、菅波、高橋、丹後、椿、三中、三輪（監事）、山岡（監事）、[委任状：5通]

議事

1. 選挙管理委員報告

日本計量生物学会選挙管理委員会委員長安藤友紀氏が欠席のため、代理の浜田庶務理事から、会長候補者、大橋靖雄氏の信任投票の結果が報告された。11月19日に開票を行った結果、賛成投票数が有効投票数の過半数を超えたことから、会長の信任がなされたことが報告された。

2. 庶務担当理事からの報告

庶務担当の浜田理事から担当業務の報告と引き継ぎ連絡がなされた。

3. 編集担当理事からの報告

編集担当の松井理事から担当業務の報告と引き継ぎ連絡がなされた。J-STAGEでのバックナンバーを含めた電子ジャーナル化がこの2年間の大きな成果であった。今後の課題として、(1)J-STAGE上での論文の投稿・査読等の管理機能の利用、(2)計量生物学論文の“supplemental material”の電子ファイルとしての公開、(3)総説を含めて論文投稿の呼びかけがあげられた。

4. 会報担当理事からの報告

会報担当の和泉理事から担当業務の報告と引き継ぎ連絡がなされた。ニュースレター111号の巻頭言は大橋会長が担当することが確認された。またニュースレターにおけるIBSのロゴの使用と、レイアウトの改善が確認された。

5. 組織担当理事からの報告

組織担当の松山理事から役員選出に関する細則の変更についての説明がなされた。

[改訂案]

【日本計量生物学会役員および評議員の選出に関する細則】

4. 会長候補の選出は、評議員選挙後の第1回評議員会で行う。

↓

4. 役員選出

(1) 会長候補については、評議員選挙後の第1回評議員会で互選により1名を選出する。

(2) 会長候補以外の理事のうち10名については、IBS Council Memberを理事として選出し、残りを出席評議員（委任状提出者も含む）による選挙/協議により評議員の正会員の中から選出する。その他の5名の理事については、会長が正会員の中から指名する。

審議の上、改訂案が承認された。

6. 企画担当理事からの報告

企画担当の和泉理事から担当業務の報告と引き継ぎ連絡がなされた。

・2013年度年会について

日時：2013年5月23日（木）～5月24日（金）

場所：パルセいいざか（福島県福島市飯坂町）

年会運営委員：大橋靖雄理事、柴田義貞氏

特別講演（24日午前に実施）

座長：大橋会長 講演者：上坂浩之氏

特別セッション（23日午後、2時間半で実施）

オーガナイザー：菅波秀規氏、富金原悟氏

テーマ：臨床試験における欠測データについて

一般セッション

新規の分野として、統計手法の応用の事例研究の追加を行い、ポスター発表の試行を行う。

特別企画（24日午後）※チュートリアルの代わり

会費は計量生物学会または応用統計学会の会員は無料とし、予稿集の費用は別途検討する。

年会会費：2012年度と同様に減額し、また学生に対する旅費の補助を検討する。

年会中の23日の昼に理事会、夕方に評議員会、

24日の昼に総会を行う方向で検討する。

・2013年度統計関連学会連合大会
2013年9月8日(日)から11日(水)まで大阪大学において開催の予定。

7. 会計担当理事からの報告

会計担当の大森理事から、学生会員の年会費を引き続き無料にする方向で検討していることが報告された。

また、佐藤会長から、2013年度予算で、名簿作成費用、事務局のバックアップ用のハードディスクを含めるよう要請があった。

8. Statistics2013 への協力依頼について

国際担当の服部理事から、Statistics2013のwebページへの協力依頼があった旨説明された。協力について承認することになり、具体的な作業については、今後、国際担当理事が検討していくことになった。

9. 共催シンポジウムの提案について

佐藤会長から提案についての説明がなされた。日本臨床薬理学会第34回学術総会(2013年12月4日(水)～6日(金) 東京国際フォーラム)における「日本計量生物学会/日本臨床薬理学会共催シンポジウム」として以下を行うことが承認された。

「生物統計家との共同作業をどうするか? (仮)」

座長：佐藤俊哉氏(京都大学)

松井研一氏(昭和大学)

講演予定者：

大橋靖雄氏(東京大学)

手良向聡氏(京都大学)

山口拓洋氏(東北大学)

10. IBS Council について

2013年6月以降も、松山理事と松井理事がIBS Council memberを継続することになった。

11. 新理事会メンバー

大橋会長より、専門領域と地域性を考慮して、菅波秀規氏、寒水孝司氏、高橋邦彦氏、椿広計氏、三中信宏氏を会長指名理事としたことが報告された。

12. 新理事の役割分担

理事の役割分担について審議を行い、2013-2014年度は次の役割分担で理事会を運営することが承認された。

◆2013-2014年度 理事役割分担

会長：大橋靖雄

庶務：佐藤俊哉、浜田知久馬

会計：大森崇、高橋邦彦

編集：松井茂之、三中信宏

会報：和泉志津恵、寒水孝司

広報：三中信宏、森田智視

企画：和泉志津恵、手良向聡、服部聡、菅波秀規

組織：松山裕、椿広計

国際：丹後俊郎、服部聡

学会賞：椿広計、松山裕

なお、監事については、10月31日開催の評議員会での決定に従い、理事以外の評議員から上坂浩之氏、山岡和枝氏の両名を評議員会に推薦し、評議員による信任投票を行うことになった。

また、2013-2014年度についても、引き続き、庶務担当補佐を栗原順子氏が担当することが了承された。

13. その他

統計関連学会連合、統計教育推進委員として、三中理事、浜田理事、岸野洋久氏を追加することを検討することになった。

今後の理事会の開催場所としては、飯田橋の東京理科大学、または、お茶の水のNPO日本臨床研究支援ユニット事務所を中心に検討することになった。

今後の対面理事会の開催予定は、2013年1月30日(水)、3月27日(水)、5月23日(木)とする。

○2013年度第1回対面理事会議事録

日時：2013年1月30日(水) 18:00～19:30

会場：東京理科大学神楽坂校舎3号館5階第2演習室

出席：和泉、大橋、大森、佐藤、寒水、高橋、丹後、手良向、服部、浜田、松井、松山、三中、山岡(監事)

欠席：菅波、椿、森田、上坂浩之(監事)

[委任状2通]

議事

1. 庶務担当理事からの報告

庶務担当の浜田理事から入退会状況と会員数の報告がなされた。また統計関連学会連合理事に、日本計量生物学会からは大橋会長、椿理事が就任したこと、次回EAR-BCは中国支部により、2013年7月6日、7日に北京の中国人民大学(Renmin University of China)で開催予定であることが報告された。

2. 編集担当理事からの報告

編集担当の松井理事から報告がなされた。2013-2014年の編集委員会メンバー(13名、うち7名*が新規)が以下のように提案され、承認された。

松井茂之(委員長：統計数理研究所)、

三中信宏(副委員長：農業環境技術研究所)、

和泉志津恵* (大分大学),
川口淳* (久留米大学),
小山暢之 (第一三共株式会社),
佐藤健一 (広島大学),
寒水孝司 (京都大学),
大門貴志 (兵庫医科大学),
田栗正隆* (横浜市立大学),
野間久史* (統計数理研究所),
服部聡* (久留米大学),
平川晃弘* (名古屋大学),
船渡川伊久子* (帝京大学)

また、学会誌「計量生物学」の発行状況、学会奨励賞について、2月上旬に選考委員会を立ち上げ、4月上旬に候補者を決定、メール理事会に諮る予定であることが報告された。

3. 会計担当理事からの報告

会計担当の大森理事から報告がなされた。2013年1月22日に学会事務局で上坂監事、山岡監事が、会計監査を行ったことが報告された。一部特別会計に含めるべき部分が一般会計に入ったまま年度を超してしまい新年度に会計の移動を行ったため、その旨を通帳に記載して対応したが、他は問題ないことが報告された。

監事から、会員の会費滞納状況を理事会が把握することが大切なので、状況分類したリストを作成すべきとの意見があった。また一般会計の次年度繰越金について、会員への利益還元として、次のような意見があった。

- (1) 新しい話題などに関する講演会を行ったり、海外からの講師を招く。
- (2) 講演会の講師を学会から出すための勉強会(研究会)に補助を出すなど、特に日本計量生物学会がフォローしていながら、実際には会員が手薄な分野の研究者の開拓をする。
- (3) IBC2012 で実施したような学生の補助を年会などに適用する。
- (4) IBC2014 の参加補助を見越して積み立てる。

また 2013 年度予算については、次のようにすることになった。

- (1) 論文掲載料については、学会員が筆頭著者の場合、無料にする。
- (2) 学生会員の年会発表補助として、3 万円×10 人を予算化する。
- (3) 中国での EAR-BC の若手発表者の補助として 10 万円×6 人を予算化し、このための EAR-BC 審査委員会を EAR-BC プログラム委員が中心となって立ち上げる。
- (4) 一般会計と特別会計を一体化することを検討する。手続きについては大橋会長が調べる。

4. 会報担当理事からの報告

会報担当の和泉理事からニューズレター111号の発行予定が報告された。巻頭言は大橋会長が担当することが確認された。

5. 企画担当理事からの報告

企画担当の服部理事から報告がなされた。

・2013 年度年会について

日時：2013 年 5 月 23 日 (木) ～5 月 24 日 (金)
場所：パルセいいざか (福島県福島市飯坂町)

年会運営委員：大橋靖雄氏、柴田義貞氏
特別講演：24 日午前に実施 座長：大橋会長、
講演者：上坂浩之氏

特別セッション：23 日午後に、2 時間半で実施
オーガナイザー：菅波秀規氏、富金原悟氏
テーマ：臨床試験における欠測データについて
以下について確認された。

- (1) 5 月 23 日 (木) は 10:00 開始で検討する。
- (2) 合同企画セッション、特別セッションの非会員の講演者については、交通費、宿泊費、謝金の補助金を出す。
- (3) 昨年と同程度の参加費にする。
- (4) ポスター発表を行う。
- (5) 懇親会費と申込み方法は応用統計学会と調整する。
- (6) アルバイトの学生は福島県立医大の学生等から確保する。
- (7) 学生会員の年会発表者に補助金を出す。
- (8) 年会中の 23 日の昼に理事会、夕方に評議員会、24 日の昼に総会を行う。

・2013 年度統計関連学会連合大会

2013 年 9 月 8 日 (日) から 11 日 (水) まで大阪大学において開催予定。

次の 2 つの企画セッションが検討されていることが報告された。

オーガナイザー：松山裕 (東京大学)

「医学分野における統計教育のあり方 (仮)」

オーガナイザー：手良向聡 (京都大学)。

「2013 年度日本計量生物学会奨励賞受賞者講演」

6. カリキュラム策定委員会報告

寒水理事から、統計教育大学間連携ネットワークカリキュラム策定委員会の活動状況について報告があった。日本計量生物学会選出のカリキュラム策定委員 3 名が所属する医学部 (医学科: 医師養成課程・6 年制) 京都大学、北海道大学、横浜市立大学における統計関連の入門 (基礎) 講義の実施状況や内容を調査したことが報告された。

また、第 4 回質保証委員会議 (3 月 16 日開催予定) において、医学・薬学分野における統計教育

の参照基準について、松山理事、和泉理事、浜田理事が報告することが確認された。

7. その他

・ Biometrics Co Editor 推薦

アソシエイトエディターの経験者を中心にして、メーリングリスト等を通じて、推薦を募ることに

3. 監事信任投票の結果報告

評議員会により、2013-2014 年の監事の信任投票（12 月 17 日締切）が行われ、賛成投票数が過

なった。

・ EAR-BC プログラム委員推薦

寒水理事を推薦することになった。

・ 次回の理事会は、3/27（水）18:00～東京理科大学で開催予定。

大橋靖雄（日本計量生物学会会長）

半数を超えたことから、理事会で推薦した上坂浩之氏、山岡和枝氏の監事の信任がなされました。

4. 2013 年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

椿 広計、松山 裕（学会賞担当理事）

日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の 3 つの賞を授与しています。この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は理事会での協議のうえ総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。

日本計量生物学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

- 日本計量生物学会賞
顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞
- 功労賞
本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛にお送りください。受賞者の発表と表彰は 5 月の日本計量生物学会総

会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします（推薦者は非公表です）。

推薦書の様式:

A4 版 1 枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と 14 ポイントで書き、本文は 10.5 ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先（住所、電話、e-mail）
- 2) 推薦理由
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名（複数の場合は全員）
- 5) 推薦者（複数の場合は代表者）の所属および連絡先（住所、電話、e-mail）

推薦締め切り期日：平成 25 年 3 月 31 日（必着）
推薦書送付先：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6 能楽書林ビル 5 階（財）統計情報研究開発センター内日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

5. シリーズ 「計量生物学の未来に向けて」

5.1 人事交流と計量生物学の発展

五所正彦（愛知医科大学）

「計量生物学の未来に向けて」というテーマで、執筆依頼があったのは、昨年 12 月上旬であったように思います。その当時、私は企業に勤務しており、企業の生物統計学の専門家として、医薬品

の研究・開発業務、特に、臨床試験の計画立案や解析業務に携わってきました。しかし、それも昨年末までのことで、約 12 年の企業での統計家の仕事に終止符を打ち、今年から現在の所属に変わ

りました。新しい職場での勤務はひと月程度ですが、医師が主導で行う臨床研究の生物統計支援体制づくり、橋渡し研究（有望なシーズの探索・基礎研究、臨床開発、臨床応用の過程を、一体的に捉えた医学研究）の計画、生物統計学の研究および教育などを進めています。

日本には、研究開発型の製薬企業はおよそ70社ありますが、どの企業にもたいてい生物統計家があります。多い企業では10名以上いるようです。日米EU医薬品規制調和国際会議 ICHガイドラインの施行などに伴い、企業における生物統計家の役割は確固たるものとなり、その立場も高まりました。ただ、昨今の製薬企業の吸収合併や日本の景気の問題もあり、企業統計家の需要は頭打ちになっている感があります。その一方、厚生労働省が推進する事業の一つである治験活性化計画や医師主導治験の体制整備などを背景に、全国の医学・看護学系大学や研究機関には、続々と生物統計家のポストが誕生しています。私もそのポストに転職した1人です。いまや、臨床研究ブーム、生物統計ブームと言えるかもしれません。

企業、大学研究機関といった所属を問わず、臨床試験に関わる生物統計家にとって、試験の計画立案、データ解析、報告業務は、重要な仕事です。臨床試験を成功させるためには、統計学的な腕前に加え、臨床試験に関わる人たちとの協調、コミュニケーション能力と経験が特に大切だと思います。大学に移ってから、医師と直接、議論する機会が増え、データの発生源により近い場で仕事ができ、大変良い経験をさせてもらっています。

その一方、医師とのやり取りで、面倒な経験もしました。日本計量生物学会ニュースレター第110号の「計量生物学の未来に向けて」で、松岡伸篤博士が「平均への回帰」のエピソードを紹介していましたので、私も紹介します。

ある臨床試験の結果を議論する会議に、その試験に関わった医師、臨床開発担当者、私が出席しました。その臨床試験の主要評価変数は、4水準のカテゴリ変数（1から4段階で、4が重症）です。患者の登録・選択基準の1つに「試験登録時の主要評価変数の値が3以上」というものがありました。相対的に重症の患者が対象ということになります。すべての患者は薬剤による介入を受け、対照群は設定されていませんでした。主解析は、介入前と介入後の主要評価変数の値を比較することで、その解析の結果、主要評価変数の介入後

の値は、介入前に比べて低下していました。解析結果を見た医師は、「ものすごく下がっているではないか、この薬は効く」と大いに喜んでいました。そんな医師を諫めるのも統計家の仕事と思い、「それは、平均への回帰、という現象かもしれません。対照群もありませんし、主要評価変数の性質（信頼性や妥当性）も良くわかりません。この試験から薬効を評価するのは難しいと思います」と申し上げたところ、その先生は怒り出し、その後、ずっと私を罵り、文句と嫌味を言い続けました。その医師が喜んでいるところ、水を差すようなことを言ったのが悪いのか、私のコミュニケーション能力が低いせいかわかりませんが、大学研究機関の統計家として同じ発言をしたら、ここまで愚弄されなかったかもしれません。なお、私はこの試験の計画立案に関わっていません。

成長には、場の変化が重要です。環境や立場の変化は、人をやる気にさせ、創造力を豊かにします。また、場を変えることで、属していた組織の長所と短所がはっきりとわかります。一方、同じ場に留まることで、刺激は減り、活力が損なわれる傾向にあります。企業、規制当局、大学研究機関の統計家、それぞれ仕事の内容や役割は異なるでしょうが、統計家として、さまざまな場で働くことにより、個々人が多くの経験を積み、成長するでしょう。有能な統計家が増えれば、計量生物学も発展すると思います。人事交流や人の橋渡しが、生物統計学、ひいては計量生物学の明るい未来を拓く、というのは少々、大げさでしょうか。

あるサッカーチームの監督の弁です。「近代サッカーでは、1つのポジションだけしかこなせない選手は一流ではない。複数のポジションをこなせてこそ一流である」。さまざまな状況に柔軟に対応できる能力が、一流の証なのでしょう。サッカー日本代表の本田圭祐選手は、ワントップ、トップ下、サイドハーフ、ボランチまでこなす一流のユーティリティプレイヤーです。また、所属チームも、名古屋グランパスエイト、VVVフェンロー、CSKAモスクワと変わって、今後、ビッグクラブへの移籍がささやかれています。

これからは、生物統計学の研究や教育を通じて、計量生物学の発展に貢献できるよう努めていく所存です。企業での経験と大学研究機関の経験を活かし、一流と呼ばれる諸先輩方に少しでも近づけるよう精進したいと思います。

5.2 生物統計家の新たな人材と活躍の場を求めて

高橋邦彦（国立保健医療科学院）

本シリーズ開始時にも書かれているように「普段の研究や教育などをとおして計量生物学への抱負や想いなど」ということで、今回この原稿を書く機会をいただきました。いざ書き始めるに

あたって、本シリーズタイトルにある「未来」とはいつだろう？との疑問が頭の中で浮かんできました。私自身にとっては数ヶ月先や1年先も未来だと思えますし、一方で我々が見ることができ

ないであろう 100 年先の未来もあります。もちろん「短期目標」「中長期的展望」などの言葉もあり、場面に応じて考えるべきことではありますが、いったい私自身のこれまでの「普段の研究や教育」は、どのくらい先の未来を意識して来たのだろうか？また今の私はどの程度の未来を見据えて研究や教育を行っていくべきなのか、と自問する機会ともなりました。皆さんは今、いつ頃の未来を見据えて研究・教育などされているのでしょうか？機会があれば（お酒を飲みながらでも）いろいろな方のお考えを聞いてみたいものです。ここでは、日本の計量生物学がより発展していくために、将来を担う人材養成と、生物統計家の活動の場を広げるという点で、計量生物学と外との関係に関して、現在の私自身が取り組みたいと考えていることを書いてみたいと思います。

私が日本計量生物学会に入会したのは 10 年ほど前になります。それまでは学生時代から一貫して数学のフィールドの中で数理統計学の学習、研究などを行ってきていました。私自身があまり外を見なかったこともあります。少なくとも学部・大学院を通して、その当時生物統計学に触れる機会はありませんでした。医学分野で統計学が使われるということは何となく話としては聞いていたものの、医学統計などという言葉を知ると、医学の知識が無い者にとって立ち入れない分野というような印象さえ感じていました。その後、生物統計に限らず、実践的な統計学の研究に興味が出てきて、幸い国立保健医療科学院でのポジションを得ることができ、丹後俊郎先生のもとで生物統計分野の一員として研究・教育を開始するに至りました。科学院では研究スタッフの大部分は医療分野の専門家であり、また厚生労働省の研究・教育機関として公衆衛生に携わる現場の医師・看護師の方を対象とした研修も実施しています。着任間もない私もいくつかの科目を担当したり、疫学の先生方との議論に参加したりすることになりました。当然何も知らない私でしたが、一方で周囲は私のことを（生物）統計学の専門家と見て質問や議論をされてきました。その度に必死に教科書的なものを含めた何冊もの本などを調べ、また身近にいらした丹後俊郎先生、山岡和枝先生にもいろいろ教えていただいたり助けをいただいたりしながら、自分自身が勉強しながら教育・研究を行っていました。

こういった私の経歴は、他分野に突然出て行った異端児だとみられることがあります。しかし本学会会員の方の中にも多くの数理出身の方がいらっしゃいます。ここ数年、私の出身大学で理工系大学院生を対象に、現在の私の研究などを紹介する講義なども担当してきました。そこでも数学出身の私が医学分野で研究を行っているという

ことに数学専攻以外の学生からも大変驚かれますが、同時に他分野へ進んで研究を行う可能性を認識し、興味をもつ学生も多くいます。私としては、生物統計学に関わっていない学生にも、その進路として生物統計分野へ進むことが一つのルートとして広く認識してもらうことができれば、より多くの人材が集まってくるようになるのではないかと考えています。もちろん即戦力ではないかもしれませんが、生物統計学の専門的な教育と併せて、他分野の学生が異端児と感ずることなく、生物統計の大学院や研究職に進むことが普通の選択肢のひとつとして考えられるような環境を作ることが重要だと思います。

そのためには、いま計量生物学に関わる私たちが、これまで以上に積極的に他分野に普及活動を行ったり、実際出向いて教育を行ったりすることも必要かもしれません。それとともに、我々自身も他分野へ進出して研究や連携を進めていくことも重要だと思います。これまで多くの先生方のご活躍のおかげで、臨床試験をはじめ多くの分野で生物統計家の重要性が認識されるようになってきています。一方で私自身が相談を受ける疫学・公衆衛生などの分野でも、まだまだ統計の重要性や統計専門家の必要性を感じられていない分野や、要望はあるものの連携がうまくいっていないと感じることがあります。新しいフィールドで仕事をするには、私たちにとってもそれなりの覚悟と、労力もかかります。しかしその結果、相手の分野での貢献はもちろん、生物統計の重要性や有益性、必要性を認識してもらうことができると思います。その連携の糸口が出来れば、次の生物統計家の新たなフィールドにつながるようになると思います。またその実績を学生教育の中で紹介することで「生物統計学は面白い」「役立つ」と興味をもってもらえれば、前述のように新たな人材をさらに集められる効果も出てくるのではないかと考えています。多くの人材と幅広い活躍の場が得られることが、結果的に計量生物学を盛り上げていく力になるのではないかと思います。

もちろんこれまでの本シリーズの執筆者の方々がかかれてるように、他にも様々な考えるべきこと、課題があると思います。また実際に全体として目に見えるような形が作られるには、やはり 5 年 10 年などの期間がかかるのでしょうか。しかしその程度の中期的な未来において日本の計量生物学が更に発展していることを目指して、私自身、目の前の短期的課題の 1 つ 1 つに対して積極的に行動していかねばならないと、今回の原稿を書きながら改めて考える機会となりました。

6. 2013 年度日本計量生物学会年会・学生会員発表者への旅費補助のお知らせ

大橋靖雄（日本計量生物学会会長）

和泉志津恵，菅波秀規，手良向聡，服部聡（企画担当理事）

2013 年度の日本計量生物学会年会は、2013 年 5 月 23 日（木）午前より 24 日（金）午前まで、パルセいいざか（福島市飯坂温泉）にて開催されます。現在確定している内容をご案内いたします。

宿泊につきましては、飯坂および近くの穴原温泉の旅館が学会にあわせた宿泊プランを用意してくれました。1 名、2 名からの宿泊も可能です。参加費、参加・講演申し込み等の詳細と併せて、日本計量生物学会ホームページ、メーリングリストなどで 2 月中にご案内いたします。

日時：2013 年 5 月 23 日（木）午前～2013 年 5 月 24 日（金）午前

会場：パルセいいざか

（福島市飯坂温泉。http://www.paruse.jp/）

特別セッション：5 月 23 日（木）午後（予定）

「臨床試験における欠測データについて」

【趣旨】

臨床試験では様々な理由からデータが欠測する。欠測データが存在する場合のデータ解析ではいくつかの統計解析上の問題があるため、臨床試験での欠測データへの取り組みは重要な課題の一つである。

2010 年に、米国 National Research Council が、報告書「The Prevention and Treatment of Missing Data in Clinical Trials」を発表し、2011 年に European Medicines Agency は「Guideline on Missing Data in Confirmatory Clinical Trials」を示した。そして、2012 年に New England Journal of Medicine で、Little らによって、「The Prevention and Treatment of Missing Data in Clinical Trials.」が発表された。これらは、いずれも欠測データに対する包括的な考え方を示したものである。

本セッションでは、(1) 最近の欠測データに関する考え方を概説すること、(2) 米国の状況を示すこと、(3) 実例を紹介すること、(4) 討論を行うことによって、これから日本で実施される臨床試験データに対してどのように考えていくべきかを共有したい。特に、これまでよく利用されてきた LOCF (Last Observation Carried Forward) 法について、今後、どのように扱っていくべきかについて議論することを試みたい。

【演者・演題】

田中司朗（京都大学）「欠測データの予防（仮）」
伊藤陽一（北海道大学）「Missing に対する解析手法の概説（仮）」

岡本暁子（ヤンセンファーマ）「海外での欠測データの扱い（仮）」

河合統介，松岡伸篤，井洋一（ファイザー製薬）
「欠測値を含む臨床データ解析の仮定と実際（仮）」

山口拓洋（東北大学）「欠測データ解析の実例－アカデミアの視点から（仮）」

安藤友紀(PMDA)，各演者「総合討論」

特別講演（2012 年度学会賞受賞者講演）

5 月 24 日（金）午前（予定）

演者：上坂浩之（大阪大学）

演題：「臨床研究に統計家はどうか：医薬品開発の事例から（仮題）」

5 月 24 日（金）午後からは、応用統計学会の年会が開催されますが、両学会合同特別企画「巨大データベースへの挑戦と社会・医療システムの変革」を実施いたします。また、同日の夕方に両学会合同での懇親会を開催いたします。（5000 円程度を予定しています。）翌 25 日（土）の午後には、両学会会長による市民講演会を開催いたします。いずれも初めて企画ですので、みなさまふるってご参加をお願いします。

応用統計学会・日本計量生物学会合同特別企画：

5 月 24 日（金）午後（予定）

「巨大データベースへの挑戦と社会・医療システムの変革」

応用統計学会・日本計量生物学会合同懇親会

5 月 24 日（金）夜（予定）

市民講演会：5 月 25 日（土）午後（予定）

【演者】

川崎 茂（日本大学経済学部，応用統計学会会長）
大橋靖雄（東京大学大学院医学系研究科，日本計量生物学会会長）

本年は、試みとして一般講演セッションにポスター発表を新設します。また、一般講演セッションの分野に、実データへの応用を目的とした「事例研究」を新規に加え、適用の際の方法の選択の指針を与える発表などを募集いたします。

さらに、今回の年会では、若い皆さんに積極的に研究発表の機会をもっていただくべく、本年会において演題発表を行う「学生会員」のみなさんに旅費の補助を行うことにしました。たくさんの

学生会員のみなさんの発表をお待ちしています。

- 対象者: 本人が講演者となって一般講演セッションで演題発表を行う学生会員(口演, ポスターを問いません)
- 補助額: 一人あたり 30,000 円を上限として旅費を補助
- 申込方法: 補助を希望する対象者は年会の講演申込の際にあわせて「旅費等補助希望」と連絡してください。参加申込み・参加費支払いを各自で行っていただき、学会終了後、補助金額を本人に学会からお支払します。ただし申込多数の場合にはご希望にそえない場合があります。補助が決定した方には別途事務局より手続き

方法について連絡します。

今回の補助は講演申込にあわせて日本計量生物学会に入会申込した学生さんにも適用されます。本年度は特別措置として学生会員の年会費は無料となりますので、周囲で日本計量生物学会に入会していない学生の方にもこの機会に是非入会と発表を勧めてください。多くの方の発表申し込みをお待ちいたしております。

発表申し込み期間 (予定)
3月1日(金)~3月30日(土)
予稿原稿締切(予定):4月15日(月)

7. EAR-BC (East Asia Regional Biometric Conference) 2013・若手会員発表者への旅費等補助のお知らせ

大橋靖雄(日本計量生物学会会長)
寒水孝司(EAR-BC2013 プログラム委員)

EAR-BCは国際計量生物学会の東アジア地域における連携を深めることを目的として、第一回(2007年12月:東京)、第二回(2010年2月:インド)、第三回(2012年2月:韓国)と開催されています。それぞれ参加報告が会報の第96号・102号・108号に掲載されています。このたび、中国支部のお世話により、2013年7月6日(土)、7日(日)の日程で中国人民大学(Renmin University of China)にて、第四回のEAR-BCが開催される運びとなりました。発表や参加登録等につきましては決まり次第、ホームページ、メーリングリスト、会報等で案内する予定です。

さらに、本学会では日本の若い皆さんに積極的に研究発表の機会をもっていただくべく、今回のEAR-BCにおいて発表を行う若手会員の方に旅費等の補助を行うことにしました。国際学会で発表できるチャンスですので、たくさんの若手会員のみなさんの積極的な発表をお待ちしています。

- 対象者: 本人が講演者となって演題発表を行う「学生会員」もしくは「30歳以下の一般会

員」(口演, ポスターを問いません)

- 補助額: 一人あたり 100,000 円を上限として旅費・参加費を補助
- 申込方法: 補助を希望する対象者は、演題登録と参加登録、参加費支払いを各自で行っていただき、その後演題登録・参加登録の受付番号を日本計量生物学会事務局に連絡してください。学会終了後に補助金額を本人に学会からお支払します。ただし申込多数の場合にはご希望にそえない場合があります。補助が決定した方には別途事務局より手続き方法について連絡します。
- 申込締切: 決まり次第お知らせします。

本補助は申込にあわせて日本計量生物学会に入会申込した会員にも適用されます。特に本年度は特別措置として学生会員の年会費は無料となりますので、周囲で日本計量生物学会に入会していない学生の方などにもこの機会に是非入会と発表を勧めてください。

8. 2013 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

手良向 聡(連合大会プログラム委員)

2013年度の連合大会は、9月8日(日)から9月11日(水)の日程で大阪大学豊中キャンパスにおいて開催されます。9月8日はチュートリアルと市民講演会、9月9日からは本大会です。市民講演会の1つとして「保健統計データの見方ー長寿で健康な社会をめざす統計ー」という計量生物関連の講演が予定され、学会主催の企画セッ

ションとして、「奨励賞受賞者講演」と「計量生物シンポジウム」が予定されています。皆様のご参加をお待ちしています。詳細については、2013年度統計関連学会連合大会のお知らせ(第一報)(http://www.biometrics.gr.jp/news/all/firstinformation_20130116.pdf)をご覧ください。

9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松井茂之, 三中信宏 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実直面に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこのを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多

いかもかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、*Biometrics*, *JABES* に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くとか公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。

これまで著者から論文掲載料をいただいていたことが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました(本ニュースレター「2. 理事会報告」を参照)。今年発行予定の34巻1号からこれを適用します。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

10. 編集後記

このたびの号から会報のレイアウトを一新いたしました。前会長の佐藤俊哉先生が発案され、*Biometric Bulletin* を参考にしました。今後も、見やすい紙面作りをめざします。

これから2年間、和泉と寒水が会報を担当させていただきます。今回のレイアウトの変更に加えて、内容についても見直しを始めてまいります。会報は、会員のみなさま方への情報発信の場であ

り、将来のための記録の場でもあります。新会長の大橋靖雄先生のリーダーシップのもと、より一層、会員のみなさま方の声を反映した会報作りに努めて参ります。

南九州では、2月初旬に「春一番」が吹きました。この会報とともに、会員のみなさま方へ春のお知らせをお届けできればと希望しています。

(九州の由布岳より)

日本計量生物学会 会報第 111 号
2013 年 2 月 28 日発行

発行者 日本計量生物学会
発行責任者: 大橋靖雄 編集者: 和泉志津恵 寒水孝司